本著概要

［作品概要］

今回、研究対象とした作品群は、太宰府謫居時代の詠作事情を探ることを意図し考察を試みるため、岩波古典文学大系『菅家文草　菅家後集』中の「476五言自詠」から「514謫居春雪」の三十九首に絞った。これらの詩群は小島憲之氏の言を借りると、「醍醐天皇の代になって五年目、昌泰（しょうたい）四年（901）正月二十五日、五十七歳の道真は突然罪を問われ、太宰権帥（だざいのごんのそち）に左遷されて都を追われた。上流貴族を流罪にする時は左遷の形をとることになっており、道真は事実上大宰府に流されたのである。『扶桑略記』によれば、道真を重用した宇多上皇はこの知らせを聞いて急ぎ参内し天皇を諫止しようとしたが、警備にはばまれて門内に入ることもできなかったという。運命を一変させたこのできごとから約二年の後、延喜三年（903）二月二十五日、道真は配所での苦しい生活の末に死を迎えるが、その間の詩集は『菅家後集』という名の詩集となって今に伝わっている。『菅家後集』は、その奥書によれば、もと『西府新詩』（「西府」は都から西方にあたる大宰府）と題され、死に臨んだ道真から封印して紀長谷雄に送られたという」（日本漢詩人選集『菅原道真』141～142頁）と説明されている。これが本稿で取り上げる作品群である。

第一部　［作品論］

この『菅家後集』中、太宰府謫居時代に詠作された「五言　自詠」から「謫居春雪」までの作品三十九首の注